

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2023

課題番号：22K13071

研究課題名（和文）21世紀アメリカ小説における時間表象に関する研究 ドン・デリーロを中心に

研究課題名（英文）A Study of the Representation of Time in the Twenty-first Century American Novels with a Focus on Don DeLillo

研究代表者

平川 和（HIRAKAWA, Nodoka）

神戸大学・人文学研究科・助教

研究者番号：40804141

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代アメリカを代表する作家ドン・デリーロ（Don DeLillo）の小説などを手掛かりにしながら、21世紀を生きる人間主体がどのような時間世界を経験しているかを探る試みである。まずは21世紀以降のデリーロ作品が、グローバル化やテクノロジーのサイバー化によって変容した人間の時間認識を表象していることを明らかにした。さらに「地質学的時間」や「スローモーション」といった時間表象を分析しながら、一般的にはポストモダニストの作家として認識されているデリーロのテキストにモダニスト流の「リリス主义的瞬間」が導入されることを発見し、デリーロの時間表象と詩的言語の密接な関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでデリーロ研究では、時間表象に関する研究はあっても、それを詩的言語の関連で論じたものはなかった。しかし、デリーロはキャリア当初から詩的言語への関心をインタビューなどで口にしており、デリーロ文学において詩的言語は極めて重要な要素となっている。本研究では、時間表象と詩的言語の関係を明らかにしたところに学術的意義があると考えられる。また、デリーロが描く錯綜的な時間世界を読み解くことにより、21世紀的時空間を生きる人間主体がいかなる存在なのかを明らかにしつつ、現代アメリカを批評するための有効な視座を獲得したところにも社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study is an attempt to explore what kind of time world the human subject living in the 21st century is experiencing, analyzing mainly novels by Don DeLillo, a leading contemporary American writer. First, the study found that DeLillo's works since the 21st century represent the human perception of time that has been transformed by globalization and technological cyberization. Furthermore, by analyzing time representations such as "geological time" and "slow motion," the study discovered that the modernist "lyrical moment" is introduced into DeLillo's texts, which are generally recognized as those of a postmodernist writer, and clarified the close relationship between DeLillo's time representations and poetic language.

研究分野：現代アメリカ文学

キーワード：ドン・デリーロ 時間論 詩的言語 マーガレット・アトウッド おうち時間

1. 研究開始当初の背景

デリーロの小説は、処女作 *Americana* (1971) 以来一貫して、多岐にわたる社会的・歴史的テーマ(メディア、JFK 暗殺、テロリズム、冷戦など)を射程に入れながら、現代アメリカを批評するための有効な視座を提供し続けている。一方で、世紀転換期を境に、彼の作風に大きな変化が見られたことは特筆に値する。20 世紀までのデリーロ作品が上記に挙げたような具象的なテーマを扱っていたのに対し、21 世紀以降の作品は例えば「時間と人間存在の関係」のような抽象的なテーマに対する意識を先鋭化させているのである。さらに、21 世紀以降のデリーロ作品に見られる大きな特徴の一つとして、「超越的な時間表象」が挙げられる。この超時間的表象とは、過去・現在・未来という連続性を持たない「混沌を極めた時間」のことを指す。ここで浮かび上がってくるのは、デリーロはなぜ世紀転換期を境に、このような「時間」への意識を先鋭化させたのか、という「問い」である。このようなデリーロの作風の変化には、21 世紀特有の時代環境が関係しているように思われる。本研究は、上述した「問い」を出発点として、21 世紀以降のデリーロ作品に対し「時間論」、さらに「詩的言語論」という枠組みからアプローチした。また、そのような解釈を通じて、21 世紀のアメリカを批評するための有効な視座を獲得することを目指した。

2. 研究の目的

20 世紀末から 21 世紀にかけて、グローバル化やテクノロジーのサイバー化が加速度的に進展し、それまで世界を規定していた様々な境界(国境や時間的枠組みなど)は溶解しつつある。換言するならば、21 世紀を生きる我々は、固定的な枠組みのなかに自分自身を位置づけることができず、流動性や複雑性がより一層増した時空間を生きていると言えるだろう。このような世紀転換期におけるパラダイム・シフトと同時に、デリーロが自身の創作のなかで「時間」への意識を先鋭化させていったという事実は非常に興味深い。つまり、世紀転換期に見られるデリーロの作風の変化について考察することは、20 世紀から 21 世紀にかけて人間の時間認識がいかに変容し、複雑化したかを探求することに等しい。デリーロが 21 世紀以降の作品において一貫して強調しているように、人間存在を定義するためには「時間」という概念が必要不可欠である。一般的に考えても、我々は「時間」という概念なしには生きていけない。だとすれば、21 世紀以降のデリーロ作品に見られる時間表象を読み解くことは、21 世紀を生きる人間主体とはいかなる存在なのかを明らかにすることに等しいと言える。

ところで、デリーロ作品を時間論という観点からアプローチした論考は既にいくつか存在している。しかしながら、デリーロの時間表象を「詩的言語論」という観点から考察した論考はまだない。ここに本研究の学術的独自性があると考えられる。21 世紀以降の作品においてデリーロが時間に対する意識を先鋭化させているという事実は、誰の目から見ても明らかである。だが、彼が時間への意識を高めていると同時に、「詩」というジャンルへの関心も強めていることは、どの論考を見ても中心テーマとしては浮上してこない。実際、21 世紀以降のデリーロ作品では、詩人の登場人物が登場したり、詩作に対する言及などが増えており、その事実は見過ごすべきではない。なぜなら、デリーロは超越的な時間世界を描写する際、そこには常に「詩的な要素」を織り込んでおり、「超越的な時間表象」と「超越的な言語としての詩」の間には深い連関性がある。本研究では、フランス現代思想を代表するジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze)の時間論や、ジュリア・クリステヴァ(Julia Kristeva)の詩的言語論を理論的枠組みに据えることで、デリーロ作品に対して独自のアプローチをし、彼の時間表象と詩的言語がもたらす「文学的創造性」を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、21 世紀以降に発表された以下のデリーロ作品を中心に扱う—*The Body Artist* (2001)、*Cosmopolis* (2003)、*Falling Man* (2007)、*Point Omega* (2010)、*Zero K* (2016)、*The Silence* (2020)。まずは、これらの作品における「時間表象」について考察したが、研究者は研究開始以前に拙論“Seize the Empty Present: The Poetics of Twittering in Don DeLillo’s *The Body Artist*”(2017)において、デリーロの時間表象を考察するにあたりドゥルーズの時間論が有効であることを既にある程度立証していた。デリーロが描く超越的な時間世界を端的に言い表すならば、「現在」という定点を欠き、過去と未来が同時に生じるような錯綜的な時間相と言えるだろう。この表象不可能な時間世界を理解するためには、ドゥルーズが提唱する「アイオン」という時間概念を参照することが有効に思われる。というのも、アイオンとは「現在」が「過去」と「未来」に分裂するまさにその瞬間のことであり、常にやってきては過ぎ去る「現在」という時間の表象不可能性をドゥルーズは指摘しているのである(*The Logic of Sense*, 1990)。

さらに本研究では、デリーロ作品の分析を通して、上記のような「超越的な時間認識」と「詩的言語」の間にある密接な関係も明らかにした。そのためには、まず、デリーロが紡ぐ詩的言語の特性を明らかにする必要があった。デリーロはアダム・ベグリー(Adam Begley)とのインタ

ビューの中で、言葉の「意味」よりも、「音声」や「形象」を重視して執筆に取り組んでいると明言している(Begley, “The Art of Fiction CXXXV: Don DeLillo,” 1993)。すなわちデリーロは、「意味から切り離された言葉の物質性」と戯れながら文を構築し、作家すら計り知れない言葉の「強度」を顕在化させ、そこに「審美的な享楽」を見出すのである。さらにデリーロは、小説家よりむしろ「詩人」の方がこの享楽状態へ接近する特権を有していると主張している。ここに、言葉のリズムと戯れる「詩的言語」に対するデリーロの並々ならぬ関心が窺えるが、彼が関心を寄せる「詩的言語」はクリステヴァの詩的言語論における「幼児言語」に通底するものがあるだろう。クリステヴァの詩的言語論では、無意味な幼児言語のリズムの中に詩人が享楽を見出すとされ、それによって「無限の意味生成過程」を享受できるという(クリステヴァ『ポリローク』、1999)。デリーロ自身もまた幼児言語の神秘性に魅せられている作家の一人であり、「高次的な幼児言語(喃語)」としての「異言」を実践することで「他なる現実」への道が切り拓かれる、と彼は述べている(DeCurtis, “An Outsider in This Society”: An Interview with Don DeLillo,” 1988)。まさに、この詩的言語としての「喃語」によって導かれる「他なる現実」こそが、「通常とは異なる時間相」としてしばしばデリーロ作品に立ち現れるのである。またクリステヴァによれば、詩的言語は、現在を宙吊りにしつつ、現在を乗り越えて過去と未来を結びつける点に、その最大の特徴を見出すという。この詩的言語の特徴は、ドゥルーズの「アイオン」という時間概念と極めて親和性が高いように思われる。そこで本研究では、デリーロ作品に登場する子供や詩人、失語症の人物などの発する不可解な言語にまず着目する。そして、詩的言語としての彼らの言葉が「意味の決定不可能性」を惹起しつつ、いかに「他なる現実」や「超越的な時間世界」を構築するか、その過程を明らかにした。

我々読者は、デリーロの詩的言語が立ち上げた「他なる現実」を目の前にして、その決定不可能な意味を問い続けることになるだろう。しかし、この決定不可能性自体は決して「無意味」なものではない。クリステヴァに言わせれば、「いわゆるありふれた言語活動がどれももっているこの決定不能な特徴を、一義的で合理的な科学的言述は隠そうとするが、まさしく詩的言語は、この特徴に対する関心と呼び起こしてくれる」のである。そして、そのような詩的言語は「意味生成性の新たな空間の、決して終わることのない無限定的な産出を促す」(『ポリローク』)。デリーロもまた、詩的言語によって主体や言語秩序が解体された時間世界を発現させ、無限の意味生成過程に読者を放り込むことで、作家すら予想しえない「他なる意味」の到来を待ち続ける。このプロセス自体に、一見意味をなさないデリーロの詩的言語の「創造性」を見出すことができる。

特に、デリーロの詩的言語がもたらす「文学的創造性」については、現代的な文脈においていかなる意義を持つか検討したい。近年のアメリカでは、トランプ大統領の登場と相まって、ポスト・トゥルースやオルタナティブ・ファクトなどと呼ばれる現象が席卷していた。フェイク・ニュースなどの虚構的言説が実効的な影響力を持つ現代社会において、同じく虚構としての物語を紡ぐ作家はどのような立ち位置を取るべきなのだろうか。ややもすれば、文学的言説とポスト・トゥルース的言説は、「虚構」という点において共犯関係を結んでしまう可能性さえある。一方で、その虚構性を「真実」として「絶対」化するポスト・トゥルース的言説は、ある意味、言語を原理主義的なものとして扱い、一義的でモノリシックなイデオロギーへと収斂していく危険性がある(例えば、トランプ大統領が掲げたアメリカ第一主義、それに付随する排外主義など)。それに対し、デリーロ的な詩的言語(文学的言説)は、その意味が決定不可能であるがゆえに、多様な意味生成の可能性を孕み持つ。そのような文学的言説は、虚構性という点でポスト・トゥルース的言説を反復しながらも、その固定的な意味作用を内側から切り崩し、無限の意味生成の空間へと解放する可能性を秘めていると言える。

4. 研究成果

2022度は、終末論的思索を展開するデリーロの中編小説 *Point Omega* (2010) に焦点を当て研究を行った。*Point Omega* における「地質学的時間」や「スローモーション」といった時間表象を分析しながら、一般的にはポストモダニストの作家として認識されているデリーロのテキストにモダニスト流の「リリシズム的瞬間」が導入されることを発見し、デリーロの時間表象と詩的言語の密接な関係を明らかにした。この研究成果は、「砂漠化する文体、滲み出るリリシズム—Don DeLillo, *Point Omega* における「静けさ」の詩学」(『神戸英米論叢』36号)と題した論文で発表した。

また、デリーロ以外では、マーガレット・アトウッドがコロナ禍に発表した短篇“*Impatient Griselda*”について分析した。この短篇では、コロナ禍がもたらした「おうち時間」をいかに過ごすべきかという問いが主題化されているが、分析を進めていくうえで、テキストの潜む「反転の力学」という興味深い要素を発見した。この発見については、『人文学を解き放つ』という入門書に寄稿した「反転の力学」と題したエッセイの中で発表した。

最終年度は、デリーロの長編小説 *Zero K* (2016) と最新作である中編小説 *The Silence* (2020) に焦点を当て研究を行った。前年度に引き続き、「人体冷凍保存」をテーマにした *Zero K* を時間表象と詩的言語という観点から分析し、人間を非歴史化する人体冷凍保存に対し、デリーロの詩的テキストが歴史化を促すものとして対置される可能性が明らかになった。この研究成果は、“*Indulging in the Poetic Jouissance: Language, Art, and Politics in Don DeLillo’s Zero K*” (『英米研究』48号)と題した論文で発表した。また、時間表象の分析を進めていく上で、デリーロ作品において詩的言語や不眠症が重要な要素として機能していることが明らかになった。

そのため、詩的言語 と不眠症という観点から *The Silence* を分析し、その研究成果を 2023 年 12 月に行われた日本英文学会関西支部第 18 回大会で「デジタル・テクノロジーの死—Don DeLillo, *The Silence* が描くバベルの塔の崩壊」という題で発表した。この発表内容については現在論文投稿中である。また、昨年出版したマーガレット・アトウッドの短篇“*Impatient Griselda*”についてのエッセイ「反転の力学」の内容を発展させたものを、2023 年 6 月に行われた日本アメリカ文学会関西支部例会において「物語の「逃走線」的デザイン—Margaret Atwood, “*Impatient Griselda*”を貫く反転の力学」という題で発表した。この発表内容については現在海外ジャーナルに論文投稿中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 平川 和 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 砂漠化する文体, 滲み出るリリズム Don DeLillo, Point Omegaにおける「静けさ」の詩学 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 神戸英米論叢 | 6. 最初と最後の頁 41-54 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 平川 和 | 4. 巻 48 |
| 2. 論文標題 Indulging in the Poetic Jouissance: Language, Art, and Politics in Don DeLillo's Zero K | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 英米研究 | 6. 最初と最後の頁 97-114 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 平川 和 |
| 2. 発表標題 物語の「逃走線」的デザイン Margaret Atwood, "Impatient Griselda" を貫く反転の力学 |
| 3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部6月例会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 平川 和 |
| 2. 発表標題 デジタル・テクノロジーの死 Don DeLillo, The Silenceが描くバベルの塔の崩壊 |
| 3. 学会等名 日本英文学会関西支部第18回大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 神戸大学人文学研究科 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 神戸大学出版会 | 5. 総ページ数 248 |
| 3. 書名 人文学を解き放つ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|